

幕内瓦版 第七号

発行 日本劇場技術者連盟

■めざせ、創造する劇場技術者

本連盟理事長・齋藤 譲一

《2009年10月26日新宿文化センターで開催されたフォーラム「めざせ、創造する劇場技術者」の講演から》

私の専門は何だろうかと自分で振り返ってみますと、今は劇場技術者を強く意識しています。私は、横須賀の高校を卒業してから東京の大学の演劇学科に進みました。そこで大学紛争を経験したのですが挫折してしまいます。そこから演劇に賭ける気になって、卒業と同時に劇団に入りました。しかし、お芝居では生活が出来なかったですね。その後は結婚を機に、29歳で国立劇場舞台課に就職することになり今日があります。

国立劇場が開場してから20年くらい経ったころのことです。1年くらいして舞台進行を任されたのですが、古いしきたりの伝統芸能の世界にはなかなか馴染めませんでした。失敗ばかりで、専門的に覚えなければならないことも多く我慢の連続でした。でも、内外一流公演の舞台現場なので活気はありました。一番印象に残っているのが、ロシアのレニングラードポリショイドラマ劇場の来日公演です。ちょうど、大韓航空機爆破事件のときでした。日本中からロシアは批判の目にさらされていました。そのためお客の入りは悪かったのですが、チェーホフの「ワーニャ伯父さん」、ゴーゴリの「検察官」やトルストイ原作の「ある馬の物語」などの名作を上演しました。自分が若いころから憧れていた本場の芝居でもあり、1ヶ月の間も劇場側の舞台監督として関わったことは本当に幸せでした。ところが、打ち合わせから実際に仕込みに入ると私一人では何も出来ないことを思い知らされたのです。その後の中国の京劇のときもそうでしたが、張り切り過ぎて気持ちが空回りしているだけでした。舞台は共同作業ですから、多くの裏方の助けや協力があってこそ公演が成り立つのです。例えば、ポリショイドラマ劇場のときのことで、図面だけ見て理解したつもりになっていて、持ち込まれた大道具の重さの計算などをしていません。バトンに大屋根を吊るす際には、重過ぎて持ち上げられずバトンが曲がってしまい途方に暮れてしまいま

した。その様子をそばで見ていた操作盤係の親方が、すぐに万力を持ってきて黙って直してくれたのです。さらに、曲がらないようにバトンを二本重ね、前後のバトンで交互に少しずつ持ち上げたのです。淡々と仕事する大胆とも思える姿に驚かされました。そのときこそ、後輩に恥をかかせないように助けてくれる先輩方のありがさが身に沁みました。そのころから、私の裏方感は変わりましたね。劇場は裏方の存在があってこそ成り立つと実感しました。

また、あるときのことです。有楽町の帝国劇場の廻り盆が故障で動かないと連絡があり、国立劇場の舞台スタッフが帝劇の本番の盆廻しの手伝いに駆けつけたことがありました。そのときは、よその公演のことなのになんで手伝うのか理解できません。後で分かったことですが、舞台を何としても成功させなければとの思いは裏方さんの共通した意識だったのです。他の劇場の事件であっても、自分の劇場と同じように感じているのが裏方なのだとな納得しました。そんなことから、だんだん劇場スタッフの仕事が好きになってきました。

その後、能楽堂に異動しましたが、そこでもいろいろなことに気づかされます。前にいた歌舞伎や日本舞踊の世界の賑やかさが懐かしく感じるし、その素晴らしさに離れてみてよく分かるのです。そして、能楽堂では不思議な体験をすることになります。少し慣れてきたころのことですが、能の装束が舞台の老松を背景にして光って浮き上がるように見えたのです。その時ばかりは、五感が震えるような感動を覚えました。これまでの自分は新劇ばかりを追い続けてきたが、古い芸能は決して否定できないと悟ったのです。

1990年代に入ると、日本に劇場革命が起こりました。テクニカルという言葉がキーワードのように盛んに使われ出します。青山劇場の誕生のころからです。コンピューターで劇場機構を制御するという前代未聞の試みのようでした。東京芸術劇場も青山劇場に習ってオープンしました。当初はいくつかの不備も見られ、アクシデントもあったそうです。その後、日本中にコンピューターを導入した専門劇場

が次々と誕生していきます。その中の一つが、私の仕事場となる彩の国さいたま芸術劇場でした。

この劇場のコンセプトは『創造する劇場』で、建物の中心から四方八方に創造の光が伸びているといったパンフレットのイラストが印象的でした。『また、演劇づくりができる!』そんな思いが私の脳裏をかすめたのです。だが、そこへ行くのは不安で迷いがありました。そのときの国立劇場の舞台技術部を築き上げた大木靖、立木定彦両氏の言葉がいまだに忘れられません。『新しい劇場づくりは夢がある。人生最高のチャンスであり、何ものにも代え難い経験である』、『真の技術者の未来は、劇場という舞台の心(中心)に位置することだ』と。振り返ると、さいたま芸術劇場で仕事させていただいたことが自分にとって今では誇りになっています。

さいたま芸術劇場では舞台技術ジャンルを任せられました。そこで舞台技術ワークショップを開催するなどの新たな活動をはじめました。アナログからデジタルへスムーズに移行するには、新しいスタイルの技術者をまず育成せねばなりません。劇場機構・機器の技術革新に伴い、先を見据えた舞台技術力の向上を図る時代に直面していたからです。

さいたま芸術劇場をどうすべきか模索が始まりました。どれも試行錯誤の連続でした。公演する演目も多様化してきますし、技術参画や協力も求められます。これまでの劇場を守る姿勢から攻める劇場技術者への脱皮が求められていました。

そして、導き出した答えは「これからは、裏方だけでなく演出家になろう」でした。これは思い切ったことですが、経験に裏打ちされたような技術力がない若いスタッフばかりでスタートしたこともあり、まず舞台の仕事を好きになって打ちこめるよう創造力をつけよう」と考えたのです。「舞台技術課だけど演出部の仕事もする。大道具も小道具も照明の仕事も演出を意識しないと成り立たない。これからの劇場に勤める者は、演出と同じようになればクリエイターとして対等の立場に立てるようになる。だから演出家以上に努力して演出家たれ!」と言い続けました。

自分もそう在りたい、自分が若い頃に目指した目標を皆に押し付けてしまった訳です。それで、若いスタッフがどう反応するのか、どう創ろうとするのか心配でしたが、皆が納得して協力するようになって大きな力を発揮できるようになりました。

すると、これまで得た経験値だけでは満足しなくなるのです。もっと何かを求めて創ろう、何かを探ろうとするのです。少しでも新しい知識を取り入

れなければならない。先輩の意見をよく聞かなければならない。未知の場所を見学して知識を深めなければならぬ。そうすると、これからやりたいことが見えてくる。そうなったときに劇場技術者は変わるのです。そのときに、「創造する劇場技術だ」と感じました。新しい時代の劇場スタッフが目指すところなのでした。

このように、さいたま芸術劇場技術課で十何年間やってきましたが、その後の私は舞台技術を後輩に譲り、管理統括室長として管理部門に移ることになります。劇場技術者がホール運営の管理者にならなければならないのでした。サービス力や営業力を重視するのはもちろんですが、やはりそこでも創造力は必要です。さまざまなアイデアを考え、たとえ失敗しても恐れずに進み、新しいマーケティングを開拓して行こう、管理だけではダメだと考えたのです。そのためには、劇場から外に出よう。街に出て街の人たちと付き合う。出会った街の人たちとは、何でもいいから劇場の話をする。劇場技術や舞台裏の話も紹介するのです。そして、舞台裏から劇場に興味を持ってもらおうとしたのです。それは、今も続いています。

劇場技術者のステイタスを向上させるということは、劇場やホールを支えてくださっている住民たちと一緒に劇場やホールをクリエイティブ化していくことだと思うのです。

どの劇場やホールにも「貸館」という言葉があります。以前の私は軽く見ていたのですが、自主公演だけでなく貸し公演から技術を学ぶことも多く経験しました。外来のスタッフに学ぶ気持ちがあれば、自分たちとは違う取り組みかたなどを発見します。今では、せめぎ合いの貸館事業こそが、日本の劇場技術を育てるに役立っているとまで思っています。ある演出家から「日本はダメだよ。ヨーロッパの専門劇場は貸館なんて無いよ」と言われました。しかし「貸館なんて」と言っても貸館がなければ日本の劇場経営が成り立たないでしょう。

では、「貸館でのクリエイティブはどうなるのか?」を考えてみます。利用者がプロモーターの公演でも、学生でもアマチュア団体でも結構です。それらの作品を劇場技術者が快くサポートしてより良く仕上げていくのも劇場やホールの役割だと思います。上演された作品が感動を呼ぶことが出来れば、貸館事業でもそれを共有し合うことで観客が身近に感じられるのです。貸館事業でも、しっかりしたサポートをして自分のやっている仕事に誇りが持てるような

劇場に働いている喜びが持てるような世界を創らなければいけないのではないだろうかと思います。

歌舞伎小道具の三代目で藤波小道具の創始者、藤波与兵衛さんは、名著『芝居の小道具・創意と伝承』の中でこのようなことを言っています。『本来、演劇と観客にとって、小道具とは、文字で説明される必要のないものである。小道具は舞台上俳優の控えめな協力者であり、小道具の価値は時間的・空間的進行の中に、いかによく溶け込み、ドラマの中によく生きていくかという点にある。そこに役割があり、生命がある』。この言葉はまさに、芝居の小道具のみならず、舞台装置、大道具、小道具、衣装、照明、音響、舞台裏全部門において通ずるものがあるのではないかと思います。つまり、様々な職種がその仕事の果たす役割を表すのに誠に的を射た言葉だと思います。そして、「裏方」という言葉は至言です。「表方」の対義語です。印象は地味ですが、劇場技術者を端的に表現していると言えます。また、劇場やホールで働いている人は常に3Kという「危険、きつい、汚い」という中で働いています。

事務職の人から見ると「彼らは休んでばかりいる」と思われがちですね。でも、実は人のいない所で一生懸命働いている縁の下の力持ちなのです。裏方が持つこだわりや誇りを大事にして陰で仕事をしています。これからも、若い人や多くの人に舞台裏の実態を伝えながら、ホールや劇場の仕事が文化的でない仕事だと思ってもらえるように、日本劇場技術者連盟で創造力を高めていきたいと思っています。(文責:高橋三十四)

■日々勉強

福井県・山下祐治

昨年春から勤務するホールで自分自身が経験したことなのですが、ある3部構成の演奏会で、第3部にのみ主催者団体が大変お世話になっていた先生のご遺影をイーゼルに載せてステージ下手へ飾りました。

第3部は、ステージ前に指揮者を取り囲み弦楽アンサンブル9名(グランドピアノ含む)が並び、その奥にひな壇2段とひな壇に乗らない1列の合計3列に合唱数十名が並んでおり、指揮者が下手からの出・ハケ時にご遺影に向かい拝礼をする形で演奏し、無事に公演は終わりました。

その終演後に来場者から「舞台の下手側にご遺影を飾ってあるのはおかしい」とホール事務所へ指摘

があったらしく、舞台を担当していた私に注意がありました。

経験上、ご遺影をセンターではなく上手か下手へ飾っている公演を見たことはなかったのですが、進行の構成上、舞台上のセッティング上のスペースにおいても下手に飾るのが妥当だと思われましたし、主催者側の希望でもあったので、何の違和感もなく進行しました。

注意を受けて自分なりに納得しようと思ったのですが、経験上このような例がなかったため、しばらく納得出来ずにおりましたが、ある方へご教示をお願いしたところ、センターに飾るのが普通だけど、それが出来ない場合は上座、下座の意味にもあるように上手に飾るのが妥当、と教えていただき、やはり下手では間違いであったと納得し、ようやくすっきりと致しました。

どんな仕事をしていても同じことでしょうけれど、いくつになっても日々勉強することが多いなあと思いきらされた公演でした。

■地方における舞台技術管理業務

茨城県・阿部喜一

私の勤務している劇場は、茨城県のほぼ中央に位置する小美玉市というところにあります。いわゆる「小屋付き」「小屋番」というのをやっております。

みなさんは、この「小屋付き」なる業務の定義が曖昧で困ったことはありませんか。なにしろ、委託業務の名称や仕様書の内容などが自治体によってかなり違いますよね。

都市部と地方では文化レベルや市場規模が大きく異なります。そういう訳で私の話は地方の公共ホールに限定させていただきますが、共通の問題もあるかもしれません。

もともとは、行政職員などの事務方には技術管理が難しいことや、民間に委託すれば「安くあがる」という発想からこの業務が発生したと推測されます。そのため、民間に委託したときに、現場レベルではなんとなく了解していた業務内容が、契約担当者やもっと上のほうで、どの部分を委託したのか明確でないまま来てしまったのではないのでしょうか。

特に地方においては、都市部のホールの契約書や仕様書をそのまま流用なんてこともありますよね。それが悪いわけではないのですが、委託が始まったばかりの時代は、少ない予算と少ない人数で職員も業者も互いに協働するという「いい関係」があったはず。ところが、時間がたつにつれて「いい関

係」であった部分が「力関係」に変化し、本来の業務内容ではない事項まで仕様書に記載されるようになってしまったのです。

まあ、ここまでは私の想像が多分に入っていますので、信憑性はありません。ただ、こういう部分を調査研究して、将来の舞台技術管理のあり方を模索しなければ、私たちの進むべき方向が見えてこないのではないのでしょうか。

たとえば、私たちの売るもの「商品」は何でしょうか。「技術」「サービス」「安全」「芸術性」などいろいろ思い浮かびますが、それがはたして、顧客の求める「商品」でしょうか。顧客のニーズや市場規模、販売方法など一般の業種では当たり前数値化されているものが、この業界では見かけないのですが、私の勉強不足のせいでしょうか。あまりにニッチな市場なので、調べてみる価値がないからデータがないのかもしれない。

それに、顧客は誰でしょう。もちろん、委託契約は行政と交わっていますから、行政が顧客です。でも、そこで支払われるお金は税金ですから、元をただせば納税者（住民）がオーナーです。そして、劇場に来る観客も直接評価を下す顧客でしょう。

経営的に検討されるべき事項が明確でないまま契約書を交わしていることはないのでしょうか。「小屋付き」はいったい何をする人か、指定管理者の場合も含めて多角的に再検討する必要があると思います。

話はガラッとかわりますが、私が最近、疑問に思っていることがあります。スモークを炊くときに、自動火災報知器の音響停止をしたいと思います。これを合法的にやっているところはあるのでしょうか。私の調べた限りでは不可能だと思うのですが、もしそうなら、業界として何か対策をしなければいけないと思います。何か、情報があれば教えてください。

まとまらない文章になってしまいましたが、これからもよろしくお願ひします。

■会員の著書を連盟特別価格で販売

齋藤理事長に続けて八板副理事長が出版した著書「音で観る歌舞伎」を会員の皆様には、残部わずかですが2,940円のところを2,000円（送料・消費税込）で販売しています。

お申し込みは、teec@pure.ocn.ne.jp（連盟）まで。ご住所はビル・マンション名、フロア・部屋番号も明記してください。代金は後払いです。

ブライダルMC ayaさんのブログから

『人間の音の感性の話から、能楽、文楽、歌舞伎の基礎知識まで。そして、歌舞伎に関しては、どんな裏方さんがい

るのか。狂言作者、音響、照明、衣装、かつらと床山、大道具、小道具。。まだまだいらっしやいます。

中でも音楽については、楽器や浄瑠璃、擬音（虫の声や犬の声など）、柝や付け、揚げ幕や大向こう、そして台詞に関することにいたるまで書かれてあります。（中略）

想像を遙かに超えた人数の裏方さんの力でお芝居が成り立っているのです。そして、すべての音は、日本人が日本人の感性で培ってきたもの。自然と体にしみこんでくるのは当然なのですね。

私自身、司会は裏方と思っているの、仕事面でも共感できる部分がたくさんありました。

本のラストにある「…何より人を幸せにし、人のために役立っている仕事をしていること、それが裏方の生きがい」そして「随分辛い思いもしたが、また好い気持なことも沢山ある」

という言葉は、今の私にとっても励みになり心の糧となりました。ありがとうございます(^-^)/ほんの一部、感想でした。。』

■連盟委員について

二つの委員会の委員を募集したところ、下記のように応募がありお願ひすることになりました。

◎キャリアアップ委員

春名高志（新）、隈元理之（既）、坪田栄蔵（既）

◎会報編集委員

山下祐治（新）、増田哲也（新）、庄司至（新）、小松正俊（新）、桑原基弘（新）、阿部喜一（新）、八板賢二郎（既）

■映画鑑賞会、全国で開催

昨年8月31日、東京・青山の松田通商株式会社の特設スタジオでローリングストーンズの映画をDVDで鑑賞しましたが、日本音響家協会が同日に大分で、12月1日に金沢で、12月2日3日には札幌で開催しました。ミックジャガーの「ギャラ以上の仕事をしているエンターテインメント」が開催意図でしたが、参加者がそれぞれ様々な見かたをして、自分たちのめざすところを見抜いたようです。このDVDを会員の方々にのみお貸しします。事務局までお申し込みください。teec@pure.ocn.ne.jp。

■会費の納入のお願い

会費未納の方がいます。事務局は少ない予算で頑張っています。振替用紙をお送りしてありますので、よろしくお願ひします。

発行 日本劇場技術者連盟

発行人 齋藤 譲一

発行日 2010年2月1日

幕内瓦版 第九号

発行 日本劇場技術者連盟

■巻頭言 舞台進行部門の誕生経緯 日本劇場技術者連盟副理事長・八板賢二郎

数年前のこと、以前一緒に国立劇場で仕事をしてきたA君から「飲みませんか」と電話があった。今は千葉県の小さなホールで仕事をしているのだと言う。

居酒屋で会って昔話に花が咲いたが、裏方の癖ですぐに仕事の話になってしまう。

そこで出た話、A君のホールの技術スタッフは3人、民謡舞踊やらカラオケ大会など市民の利用が多く、すべて常駐スタッフで賄っていて忙しい日々を送っているとのこと。スタッフを増員して別料金などを請求することはしていない。どうしても足らなければ、同会社が受託している別のホールから助っ人を呼んで間に合わせるている。

常駐技術者がいるのに上演スタッフに加わらず、自社のスタッフを増員させて生計を立てている指定管理会社が多い昨今、少ないスタッフをフル活用して市民に喜ばれていて、それゆえに市民の利用が多く更に運営スタッフが忙しくなるという嬉しい悲鳴が聞こえてきた。

A君は愚痴を言うこともなく、このように少人数で運営するには「舞台進行」担当の存在が必要であると力説していた。主催者と綿密に打ち合わせを話して、舞台の仕事全体を円滑に進行させる役の力によって主催者が満足し、終演後に「また、ここでやるからよろしくね」といってお帰りになるという。

主催者や出演者は、誰が照明で誰が音響なのかなど知らない。だから、誰でもいいからそこにいるホールのスタッフに注文や訂正を申し出るので。ここで、「俺は照明じゃないから・・・」と逃げられない。その注文を承り、正確に担当者に伝えて、滞りなく全体の進行を司るのが舞台進行の仕事である。マイクの仕込み替えもするし、照明の色替えもし、マルチタスクだ。これが、地域住民のためのホールの自立した運営形である。

A君は「国立劇場のようなわけには行かないんですよ」という。照明オペレーターも音響オペレーターも調整室に籠っていたのでは仕事にならないのである。このような状態で仕事をしているホールは全国に多々ある。いや、海外に行っても地方の劇場は、このような運営をしているのが現実だ。

日本には、これまで照明と音響の団体と検定は存在しているが、「舞台」と呼ばれる操作盤操作員や舞台装置の組立などをするスタッフの団体もなく、そのための教育機関もなかった。

居酒屋でA君が真顔でまくし立てた「舞台進行は重要なのだ！」の言葉に感化されて組み立てたのが、本連盟の第1種劇場技術者資格認定講座である。

これは、照明のことも音響のことも理解している技術監督として、主催者や演出者の考えを汲み取り、そして出演者を安全に舞台に立たせることができる

舞台全般の仕事をするスタッフを育成するためのセミナーなのである。

現在、舞台進行に特化して、さらに高度な技巧を身に付けるための第2種劇場技術者技能認定講座のコンテンツ作成を急いでいる。

最近、このような地域住民を優先した公営ホールを差別化しようとする動きが目立つ。全国に2000以上もあるすべての公営ホールが西洋のオペラハウスの運営方法を目指さなければ文化国家にならないのでしょうか。地域住民が利用する公営ホールだって大切であり、地域住民の表現活動があってこそ文化芸術の質を底上げできるのだ。そのために文化芸術振興法が生まれたと思うのだが、私たちに対して、その効力は？である。

この夏、上高地に行ってきた。「自分で餌を獲らなくなるので、猿やカモに餌をあげないでください」との注意書きがあちこちにあった。

しばらく川辺を観察していると、観光客が座り込むと一羽のメタボのカモが寄ってきて餌をくれと促す仕草をしている。面白い芸を見せてくれれば餌をあげるのでしようが、観光客は誰も無視して餌を与えません。余所のカモは一生懸命、川に潜って餌を獲っていた。

ふと、補助金で自分を裕福にしようとしている人たちが頭に浮かび、その人たちが自分で餌を獲らないカモに見えてきてしまいました。

私たちは、地域住民のための劇場や音楽堂の運営を、自発的な協同によって進歩させてはいかげでしょうか。

■第一種劇場技術者資格認定講座を 大阪府貝塚市と宮城県加美町で開催

大阪府の貝塚・コスモシアターでは2回目、宮城県の中新田バツハホールは初めての開催。多数の団体のご協力により無事終了しました。

貝塚開催は一般社団法人日本音響家協会・大阪府公立文化施設協議会・近畿地区公立文化施設協議会の後援、貝塚市文化振興事業団の共催。

宮城開催は中新田バツハホールとの共同主催、加美町教育委員会の共催、社団法人日本照明家協会東北支部・一般社団法人日本音響家協会・東北地区公立文化施設連絡協議会・宮城県公立文化施設協議会の後援で実施しました。

その成果は、次の受講者の感想文を読んでいただければ一目瞭然であります。

大阪・第一種受講者の感想

◎舞台運営に関する技術を再び基礎から学ぶことができて、非常にためになる二日間でした。

◎全体的に解りやすく、有意義な時間でした。常に基本を忘れず、この二日間で学習したことを持ち帰り、今後の業務に活かしていきたいと思ひます。

◎本当に楽しく受講させていただきました。受付時から、ホールの方の対応もとても親切で感激しました。この機会をいただいたことにたいへん感謝いたしております。また、私たち受講生のための準備、ばらしをしていたスタッフの皆様も本当にありがとうございました。この出会いを大切にしたいと考えております。

◎各部門の専門家による講義は的を射たものも多く、これからの仕事に有意義でした。強いて申すならば実技の時間にももう少し割り当てがあると良かったかも。この検定だけではないのですが、すべての舞台芸術関連の検定や資格が有効なものに成長していただければと思ひます。

◎日頃から行っている仕事ではあるが、初心に戻るつもりで受講させていただきました。法規など詳しく知らないことも多く、そのことが職場の安全や観客の安心に直結していると痛感しました。今後、ホールに戻ったときに、他のスタッフと意識を共有していければ良いと思ひます。短い時間でしたが大変有意義に過ごすことができました。

◎ホールの音響担当として舞台で仕事をしていますが、舞台や照明などは体験したことがなく仕込みから本番、ばらしまでやって、大変勉強になりました。また、このような機会がありましたら参加したいです。

◎この仕事をさせていただいて、ある程度のキャリアになると、知っていて当たり前なことをしっかり理解していないことがあります。今回の受講で、それを確認できたことがたくさんありました。

大阪・第三種受講者の感想

◎興味があると言うことだけで、ほとんど何も知らない身で受講致しました。学ぶことだらけの二日間でした。家でもう一度教本を読もうと思ひます。今回を機に、許されることならもっと勉強し、いつかは舞台創りのお手伝いできればと思ひております。

◎大変充実した内容で勉強になりました。ありがとうございました。自主事業ではクラシックコンサートの立会いが多く、音響卓や照明卓、ライト等、ほとんど間近で見ることがなかったので興味深かったです。教本は読み返し、忘れないようにしていきたいと思ひます。

◎プロの方々と混じって劇場のことを広く易しく基本的なことから学べて良かったです。これらのことは劇場の外に出ても応用の利く素晴らしいことだと思ひました。特に安全確認においての徹底した声掛けなど、大変ためになりました。

宮城・第一種受講者の感想

◎舞台業務を担当するようになり5年6ヶ月がたちますが、初めて耳にする言葉もありました。危険と隣り合わせの業務であることを身にしみて感じました。喜んでいただけるステージをつくっていくためにも、今回の劇場技術検定で学んだことを再認識し今後にかかしたいと思ひます。

◎舞台進行・照明・音響それぞれ実践的な勉強ができ、たいへん有意義だった。先生方の限られた時間での的確な指導は、とても楽しく頭に入りました。どの分野も、互いに声を掛け合っテコミュニケーションをとるのが大切だなと感じました。

◎音響・照明・舞台をある程度理解してそれぞれの業務をこなすということは、それぞれのミスも減るし一つの作品をみんなで作ろうという『やる気』にもつながると思う。人件費の関係でもっと人数が減るので大変だと思ひていたところで、もうそこまで意識した内容(講義)だったので、たいへん参考になった。自分自身ではある程度実行していたが、他の人に対しては強く指導できなかったもので、これからは今回の講義の内容を伝えようと思ひます。

◎2日間とても楽しかったです。色々なことを教わるほど舞台って奥深いと思ひ、ますます興味がわいてきました。演習では、みんなで一つのものを作り上げることの楽しさと達成感をリアルに実感できてとても貴重な体験ができました。

◎教えて頂く先生の話方が解り易く丁寧だった。本を読んでもイマイチ理解できなかったロープワークなども、見ながらやることにより覚えることができた。忘れないように、今後も思い出す機会を作りながら自分のものにしていきたい。舞台ワークの平台への毛氈(もうせん)の敷き方や所作代の知識なども、本に書いてあっても覚える機会のない内容が多く、とても参考になった。そして何よりも夜の飲み会(ワンコイン交流会)がとても楽しく、普段では聞けない話や沢山の同じ仕事をしている方々と知り合い、話をする機会ができたことが嬉しかったです。

◎今回、第1種劇場技術者検定を受講し、今までなんとなくやってきたことをしっかりと理解することができました。私が勤務する施設は南三陸町より指定管理を2009年度より受け、引き継ぎとして町職員の方から文化ホールの操作など様々なことを習い、日常、特に困っていませんでしたが、今回学んだことを活かしより良い物を、使う方へ提供したいと思ひます。私の実際の仕事は、スポーツのインストラクターですが、南三陸町で文化ホールを運営するにあたり、これからも色々なことを学んで文化事業を行い、南三陸を盛り上げられるようにしていきます。今回は色々ご指導いただきありがとうございました。また、このような機会があることを希望いたします。

◎この度は、受講させていただきました本当にありがとうございました。私は、ホール担当者として教わる方もなくいろいろと分からないことが多くありましたが、この二日間で、基本と大事なポイントを学べました。講義の最初にマルチタスクという言葉がありましたが、ホールの舞台運営では何でもやれるようにならなければと思ひました。私共のホールも指定管理者に移り変わりつつあります。この機会に、この検定講座を受講させていただき、ありがとうございました。この検定に合格できたら、この資格は私にとって生き残っていく宝になります。

宮城・第三種受講者の感想

◎講師陣の指導が良く理解が深めた。総合演習でピンスポを担当したが、他の部門も体験したかった。

総合演習の内容をもう少し複雑な構成でやってほしかった。

◎劇場技術者検定を受けて舞台進行のイロハを学び、これからの活動などに参考となったと思います。特に照明の仕込みはかなり大変だと感じました。

◎何らかの機会にステージに立つことがあるのですが、今回の講習に参加させていただいて、音響・照明・進行の基本をあらためて学ばせていただきました。とても新鮮でした。各スタッフの協力と観客が一体になり、感動が生まれる・・・。今の時代だからこそ大切だと思います。

◎劇場というものが、安全性の点から見ると大変危険な場所であると認識できました。その危険を避けるための掛け声や確認の声掛けは、作業をスムーズに進めるもので、私たち一般の仕事でいう「コミュニケーション」と同じであると思いました。また、照明や音響というものが、奥深いものであることも強く感じました。

◎今までは劇などを客の立場で見えていましたが、今回の検定に参加し一つの劇などを完成させるためには、劇場スタッフの協力があってこそだと思いました。また劇を見学する際は別の角度から見られると思います。最後に劇に関するすべてに「美」を感じました。次は、今回よりワンステップ上の勉強をしたいと思っています。

◎劇場技術の奥の深さに講師先生のお陰をもちまして、たいへん勉強になり、私にとってこれがさわやかと思って、これからが勉強だと思っております。音響関係について興味があり特に勉強していきたいと思っています。

◎講師の先生方の分かりやすい説明で、初心者でも理解することができました。総合演習では皆さんの気持ちを一つにして終えたときには「達成感」を味わうことができ、とてもすばらしい経験をさせていただきました。

◎米空軍のジャズバンドが加美町に来たのを見たのが受講のきっかけです。普段、テレビ等で何気なく舞台やステージの様子を見ているわけですが、普段は見えない影の部分でのスタッフの頑張りが作品を支えていることを改めて実感させられました。

◎座学だけでなく実際に機材に触れ、操作し、皆で協力して一の作品を作り上げる貴重な体験をさせていただきました。

■コスモシアターでの第一種劇場技術者認定講座を受講して思うこと

高野 仁（新川文化ホール）

富山県文化振興財団に入って今年で17年目となり、4月に富山県民会館から新川文化ホールへ異動いたしました。客席数こそほぼ同じ位ですが、舞台の大きさは倍以上、よって、仕事の際に歩く距離は倍以上となり、喜ばしいことに数Kg 痩せました。

先日、7月22・23日2日間に渡り、大阪府貝塚市コスモシアターにて開催された日本劇場技術者連盟主催による第1種劇場技術者検定講座を受講してきました。

講座内容は、劇場に従事するスタッフとしては、極めて基本的な事項が多いということを知っていましたので、基本に帰るつもりで受講しました。

舞台・音響・照明の基礎的な講座内容は確かに新鮮でしたが、その中にも実は知らなかったことがあり、知らないままにしていたことを恥ずかしく、劇場法規に関する講座がありました。劇場で法律的に制限されていることは数多くあり、私自身、劇場で従事するスタッフとして働く中で、当然のことと解っていることばかりです。

ただし、私には未だに後悔している発言があります。この仕事を始めて間もない頃、あるお客さんに「それは今までやったことがないから、やってはいけません！」と言ってしまいました。当然、お客さんは「どうしてやってはいけないのですか？」と聞きます。しかし、当時の私にはそれを答える知識も経験もなく、ただ「駄目です」というばかり。お客さんは当然劇場のスタッフが言うのだから、諦めるしかない。

それから17年経ち、経験すればするほど当時の発言を恥じるようになりました。それ以降、「電気・消防・労働など様々な法律が関係する「劇場」という創造空間では、法律を知らないことは演出の幅を狭めることになる」ということを常に意識するようになりました。

上司から「出来ないというな。出来ないならどうやったら出来るか考えろ。」とよく言われました。我々の仕事の肝は、ここにあると思っています。

私自身、初心者と経験者の中間の域に差し掛かり、改めて「基本」の大切さを知ることができた、本当に充実した2日間でした。

（日本音響家協会北陸支部会報から転載）

●ホール使用料の未収対策はあるのか

東京・五十嵐功太郎

私の所属する施設は、約340席の民間の多目的ホールです。

公共ホールさんの場合は、催物開始前に全額精算等の使用規約がある施設もあると思います。民間の場合には使用規則上、記載があっても「月末締・3ヶ月先払(振込)」という傾向も多く、月末催物の場合には4ヶ月先にやっとな入金というケースも多くあります。

20年前は2～3年に1件程度の発生率だった未収案件、当ホールでは近年激増しています。

初回利用の主催さんが3割、利用歴のある主催さんが7割という感じで、未収発生率の占率となります。結果的に回収できない案件も増加していますが、アイデアを弁護士との協議のなかでいただきました。

企業の大小に関わらず、まして個人や屋号主催の場合は、特に身分証明書の提示と控え(コピー)の保存です。

個人情報の質と量が増加してしまっていますが、仮に催物が未収案件になった場合に、企業・団体解散後でも追いかけることのできる情報として、個人特定をするという考え方です。

防衛的発想でどこまでできるのか分かりません。

これを実践するにはハードル感もあり、使用規則変更等の大掛かりな対策となりますが、他の施設ではどのような対応をされているのか、知りたいと思いました。

未収や責任回避的な主催に対する「技」を、お持ちではないでしょうか。
(民間施設の抛り所が少ないために、情報収集目的で参加させて頂いています)

●日々勉強（パート2）・・・少し精神論かもしれないが・・・

福井県 山下 祐治

普段、何気なく暮らして仕事をしていると、自分の知識がまあまあ色々なことを知っている、と思い込んでいたりします。しかし異業種の方や、他の地域の方々とお目にかかってお話をすると、なんと多くの気づきがあるのか、と思い知らされます。

思い知らされた後は、もっと様々なことを勉強しなきゃと思います。舞台に関するだけでなく、人間としてももっと成長したいと考えるようになりました。

当たり前のことかもしれませんが、本を読み、絵画展に行き、様々な公演を観に行き、良いものを目にして良い音を聴く。実際に直接感じることで感性を磨くことは非常に必要なことだと思いました。

年齢を重ねて守勢にならないように、人との縁、出会いをこれからも大切に、日々勉強を続けて行きたいと考えています。

●常磐道沿線の劇場に注目

茨城県・阿部 喜一

「小美玉市四季文化館」をご紹介します。《みの〜れ》という愛称がありまして、地元ではこちらのほうが通りがいいようです。

《みの〜れ》は平成14年11月オープンでまもなく8年目になります。もともと、美野里町という人口2万5千人の小さな町で建てた劇場ですが、オープンまでに7年間かけて、住民の話し合いが行われました。キャバ600席の大ホールと平土間形式の小ホールからなる小さな施設ですが、稼働率は毎年、県内トップクラスです。

直営館ですが芸術監督を置き、館長は民間人を採用し、住民の「企画実行委員会」という意志決定機関があります。住民劇団・住民楽団・和太鼓グループを育成団体として抱えていて、それぞれに係わるワークショップ、さらには地域や学校へアーティストを派遣するアクティビティ活動なども盛んに行っています。そして、ボランティア組織の「みの〜れ支援隊」(160名)が自主事業を支えています。

今年の1月に「地域創造大賞(総務大臣賞)」というのをいただきました。これからの地方劇場の方向性を見るのにはいいモデルになっているらしく、当初から視察が絶えません。

「小美玉市四季文化館」と「水戸芸術館」、さらに福島県の「いわき芸術文化交流館(アリオス)」の3館は

それぞれが独特の運営をしていますので、常磐道での見学ツアーなどいかがでしょうか。

ホームページ <http://minole.city.omitama.lg.jp/>
(10月中旬ごろまでリニューアル工事中です)

●がんばろう宮崎！・・・その後 これからが大変

宮崎県・出井 稔師

口蹄疫の終息宣言が出されて1ヶ月が過ぎました。被災された農場や地域の方々には悲惨な状況でした。ここ数ヶ月はイベントや祭りなどが中止や延期を余儀なくされていたところでした。

しかし終息宣言が出されてからの宮崎は、復興イベントとして宮崎を盛り上げるべくあちこちでイベントや祭りが開催されています。私たち業界の裏方さんたちも人手が足りないという騒いでおります。沈んでいた宮崎も心なしか賑やかな空気に包まれています。

被災された方々はこれからが大変な時期だと思えます、私たちも出来ることから応援していきたいと思えます。「がんばろう宮崎！」

●タイでボランティア活動をしてきました 富山県・山本 広志

先般、タイでの植林ボランティア活動に参加しました。タイ北部のチェンライより田舎でメーコン川の対岸がラオス国境というチェンコンという場所での植林活動です。現地は山岳民族が多く、山の木はほとんど伐採され、焼き畑農業で生計を立てている地域です。小学校の生徒の8割が山岳民族でタイ語が話せないのです。この地域は3つの国境が隣接するゴールデントライヤングルといって、今はどうもろこし畑が多いのですが、昔はケシの栽培で有名なところなのです。

オイスカというNGO団体の企画に参加したのですが、ちょうどタイは雨季で2日間とも雨の中、地域住民や小学生300名と一緒にチークの苗木5000本を植林しました。

象のトレッキングなど多少の観光もあったのですが、毎日食べる食事が美味しく、結局、こんな猛暑だというのに3kg増と、ひとまわり大きな体型に成長して帰国しました。

●我がホールの公演情報

埼玉県・戸張 浩一

私の職場、上尾市文化センターにおいて12月18日、歌舞伎ルネサンス「応挙(おうきよ)の幽霊」が上演されます。

出演：朝丘雪路、萩原流行、西川扇与一 他

開演：13時30分

料金：S席前売り4,000円(当日4,500円)

A席前売り3,800円(当日4,300円)

問合せ先：048-774-2951(上尾市文化センター)

●劇場管理者に求められるエコ化推進！！ 東京都・市ヶ谷 昌典

費用対効果が得られる LED 蛍光灯販売開始のお知らせします。しかも、非常灯や誘導灯などにもそのまま使えます。

エコ化推進を求められる！舞台照明はまだ難しい。でも駐車場や会議室、通路等などの蛍光等は LED 化出来ないのか。というお話を良く耳にします。

しかし、実際には安定器を切ったの設置などで工事費がかさみ、「CO₂は削減できるし、電気量は下がるけど費用対効果が出てくるのは4、5年後！」これでは交換した意味が半減してしまいます。

そこで、国内独自の特許技術を応用し国内最安値「40W9000円台 / 1本での販売」でのご提供が可能になりました。詳しくは下記サイトをご参照ください。

<http://www.rekooland.co.jp/product/ledf1/>

●ホールの迷惑携帯電話音シャットアウト に朗報 株式会社マクロスジャパン（連盟会友）

携帯電話抑止装置は全国のホールへの普及が進んでおりますが、現在導入をご検討されているものの購入するには高額だ、電波環境が変化するたびに追加予算を必要とするのは厳しい、とお悩みのホール、劇場様にお勧めのプランがあります。

初期費用なし、月額固定料金（3.5万円～）で定期保守、電波環境変化への追従などすべて対応する「テレ・ポーズ固定レンタルプラン」です。

詳細につきましては080-1035-5389、または03-3666-6767まで、お気軽にお問い合わせください。

■おすすめの2冊

◎街場のメディア論 740円（税別）

内田樹著 光文社

テレビの視聴率の低下、新聞部数の激減、出版の不調、未曾有の危機の原因は何処にあるのか？

患者を「患者様」と呼べという厚労省の通達から患者のわがままが始まり医療の危機に、そして子供たちを客扱いしたことから始まった親のクレーマー化によって起きている教育現場の崩壊などに加担し続けているメディアに、その本質を問うている。

◎《働く》ときの完全装備 1,680円（税込）

肥下彰男 / 橋口昌治共著 開放出版社

大阪府の高校の教諭と京都市の労働組合の委員長が、中・高校生に労働法を学ばせようとして著したもので、「15歳から学ぶ労働者の権利」と副題がある。

社会に出て不当解雇や賃金未払いなどの労働トラブルに見舞われても泣き寝入りすることのないよう、具体例で分かりやすく解説している。

子供の時から、強い労働者になるための教育をしなければ、泣き寝入りで人生が終わってしまう。

■勉強会「劇場技術者のエコ挑戦～これからの省電力と舞台照明を考える～」の開催報告

2010年7月12日（月）、ルノアール四谷店・マイスペース3Aにおいて、お二人の講師をお招きして開催した。

1、商用電源についての基礎知識 講師：伊代野正喜氏（元ヤマハサウンドテックで保守・測定を担当 / ザ・ゴールドエンジン相談役）

2、LED 舞台照明の進化 講師：市ヶ谷昌典氏（舞台照明家 / 株式会社リクランド代表）

「商用電源についての基礎知識」は、電源のオーソリティー・伊代野さんの長年の経験に基づいた内容で、あらためて電源の基礎知識の大切さを学べた。

舞台照明家・市ヶ谷さんによる「LED 舞台照明の進化」は、広範な仕事に従事してきた照明家からみた内容となっていて、LED のさまざまな利点と欠点理解できて、今後の活用の参考になった。また、LED を使用したときの電気料金についての比較も示されたので、省電力と経費削減が明らかになった。

今回の勉強会は、照明・音響・舞台進行が同一テーマで学ぶという画期的な内容なだけに、この場だけに留めるには惜しいという意見が寄せられている。

◎このセミナーのまとめ

この勉強会を開催したキッカケは、本年1月に博多で開催された音響機器展示会で「省エネを理由に全国の劇場・ホールの電源電圧を200Vにすれば景気対策になるのでは」と、地デジ化の2匹目のドジョウを狙う話題が出たからだそうです。

結論から言うと、オームの法則から分かるように消費電力は変わらないのですが、電圧を高くすれば電線の抵抗による電力損失が少なくなるというメリットはあります。劇場でも、照明器具を200Vにすれば電線を細くできるし、トータルで考えるとわずかな省エネになるかも？です。

エコの点から言えば、エコ電線というのを使用すると、焼却処理や火災によってダイオキシンやハロゲン系ガスが発生しないそうです。

伊代野さんの講義で、「シュンティ」の話がありました。以前は「瞬間停電（瞬停）」のことで、現在は電力会社の解釈で「瞬間低電圧（瞬低）」となっているようです。このシュンティでコンピュータのデータが消えてしまうことがあります。そのために無停電装置、つまりバッテリー作動に切り替えるわけですが、ノートパソコンなら、バッテリーを搭載しているので、シュンティの影響は受けません。

さて、劇場の省電力をめざすなら、LED の進化が気になります。

消費電力が白熱灯の約1/7、寿命が40倍というLEDは省エネ効果では満点です。しかし次のような問題点もあります。

◎ノイズの発生で音響機器への影響がある。

◎電磁波の発生で携帯電話が繋がりにくくなる。

◎ LED 素子は熱に弱く、放熱させないと性能劣化、寿命縮めることになる。

また、LED は紫外線を発しないので、紫外線で劣化する CD に対しては優しい光ということになります。そして、紫外線を好む虫も寄ってこないで夏の屋外照明に適しています。

舞台照明としての LED は、演色性の問題があります。演色とは「物体の色の見え方に照明光が及ぼす影響」のことで、演色評価指数というもので評価されます。

舞台照明は光の三原色、赤・緑・青 (RGB) の混ぜ具合でさまざまな色の光を作り出せます。従来の舞台照明はカラーフィルターを用いて、三原色を均等に合成すると白色が作れるのですが、さらに黄を加えると純白が作れます。LED の場合も三原色を発光させる素子を使用して、それを加減してさまざまな色を作り出しますが、やはり黄色を加えなければ良好な白は作れないそうです。したがって、RGBY が基本色になります。

LED 照明は、未だ従来の照明に追いつくところまでは到達しておりません。ショービジネスや現代舞台芸術には斬新な照明として用いられるようになって来ましたが、能楽・歌舞伎・日本舞踊などの伝統芸能で使用するには未だ抵抗があります。

しかし、新作歌舞伎などには使用すれば良いと思います。それが「カブキ」原点なので、よく考えてみれば、現代の歌舞伎照明は、国立劇場が開場した 40 年前に比べてみても進化しています。

さて今後、劇場の照明はどうなっていくのでしょうか。舞台作品への全面的な導入は無理でしょうが、部分的に用いられていく中で、メーカーの競争原理が働いて私たちが望んでいる器具は意外と早期に完成する予感がします。

それまでは、劇場外観のライトアップ、ロビーとホワイエの照明、客電や足元灯に LED 照明を使用して省エネを図るべきだと思います。LED そのものが省電力ですが、LED の光には赤外線がほとんど含まれないため、室温の上昇も抑えられて空調経費も削減できます。二重のエコです。

また、舞台照明が LED になると照明による舞台の温度上昇を防げるので、舞台と客席の温度が均等になり、温度差による緞帳のアオリもなくなります。

市ヶ谷さんは次のような、LED を導入前にやるべき省エネ策を、提案しました。

◎使用していない照明は、こまめに消そう。

◎作業灯 (地明かり) の回路を個別にして、舞台照明装置から切り離そう。

◎捨て明かり (予備的な明かり) を減らそう。

◎明かり作りの時間を短縮しよう。そのためにはデータシートをしっかりと書こう。

◎灯体やコンセントなどのメンテナンスを定期的実施して、接触不良による電力消費を避けよう。

日本のバブル期、明かり合わせに 3 日かけたという照明家がステータスを向上させました。昨今の現代劇では、稽古場で稽古すべき段階から舞台稽古を開始して、実際に照明を当てて、あーでもない、こうでもないという長期稽古を続けているといいますが、これは大規模な公営劇場のことですが、要する

に演出が決まらないで、試行錯誤しているのです。この時間をもっていただきたいと思います。

最後に 2 つの提案をします。

舞台照明メーカーへの注文として、現在使用している灯体の電球を交換するだけで LED にできるようにしてほしいものです。ここで、全機種交換させて儲けようなどという商法はもう通用しない時代なのです。これに逆行しているのが現状で、これが国際協力に勝てない原因なのではないでしょうか。昔の日本の家電メーカーは、各国のユーザにマッチした製品を製造して、世界から注目されていましたが、いまやそのようなモノ作り精神は消えうせ、隣国にその地位を奪われてしまいました。

そしてもう一つの提案です。全国の劇場・ホールの LED 照明化に国から補助金を出すべきです。そうしないと CO2 削減目標を達成できないでしょう。

2500 もある日本の公共ホールの 50%でも省エネに協力すれば大きなエコになるでしょう。(編集子)

★★★★★連盟イベント予告★★★★★

◆裏方のための教養講座

日本の演劇～これまで演じられてきた芝居～
創造する劇場技術者のために

能楽や歌舞伎からミュージカルまで、さまざまなジャンルの演劇を裏方の目線で解説します。

講師：齋藤 譲一、八板賢二郎

日時：11月29日(月)13時15分～16時45分

会場：新宿文化センター第二会議室

参加費(資料代)：2,000円、会員500円

◆第一種劇場技術者技能認定講座

日時：2011年3月10日(木)～11日(金)

会場：埼玉県・桶川市民ホール

受講料：12,000円、会員8,000円

市民などを対象とした第三種検定講座も同時開催します。

◎イベントのお問合せ、お申し込みは事務局へ

teec@pure.ocn.ne.jp

03-3991-6402

■新会友

10月から劇場運営シンクタンク「ザ・ゴールドエンジン」が会友として入会しました。

■お願い

PCメールアドレスを連盟にお知らせください。連盟の経費(郵送料)削減とエコのため、会報をメールでお受け取りいただくとありがたいです。ご協力よろしくお願ひします。(事務局)

発行 日本劇場技術者連盟

発行人 齋藤 譲一

編集 阿部喜一、桑原基弘、小松正俊、庄司至、
増田哲也、八板賢二郎、山下祐治

発行日 2010年10月1日